慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	アメリカのカレッジベースボールの組織とその現状についての一考察
Sub Title	Discussion on the organization and actuality of American collegiate baseball
Author	綿田, 博人(Watada, Hirohito)
Publisher	慶應義塾大学体育研究所
Publication year	1989
Jtitle	体育研究所紀要 (Bulletin of the institute of physical education, Keio university). Vol.29, No.1 (1989. 12) ,p.31- 44
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00135710-00290001-0031

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

アメリカのカレッジベースボールの組織とその現状についての一考察

綿　田　博　人*

Ⅰ. はじめに
Ⅱ. 組織
Ⅲ. 現状
Ⅳ. むすび

Ⅰ. はじめに

ベースボールは，アメリカ合衆国で誕生したスポーツであり，今日，アメリカンフットボールと並び，国技として，その隆盛を誇っている。1839年，アブナー・ダブルディ（ABNER DOUBLEDAY）が，ベースボールのフィールドのダイヤグラムを考案し，それを用いてゲームを行い，その後，1845年，最初の野球組織であるニッカーボッカークラブが結成され，試合の標準ルールを作成し，翌1846年，アレキサンダー・カートライト(ALEXANDER CARTWRIGHT)が，今日と同様の正方形のダイヤグラムを考案し，近代ベースボールの基盤を作り上げたのである。そして，その後1857年に NATIONAL ASSOCIATION of BASEBALL PLAYERS (NABP) という最初のアマチュア野球連盟が結成され，ベースボールを統轄し，それ以後，プロフェショナル・ベースボールチームが誕生し，今日まで発展してきたのである。

また，わが国にベースボールが紹介されたのは，1872年であり，最初は，学生野球を中心として発展し，その後プロフェショナル・ベースボールチームが誕生し，今日では，最もポピュラーなスポーツにまで発展してきた。さらに，ベースボールは，アメリカ，日本にとどまらず，5大陸の多くの国々にまで普及していき，世界的にも重要なスポーツ活動の1つとして発展してきた。

1940年のセントルイスでのオリンピック，1912年のストックホルムでのオリンピック，1936年のベルリンでのオリンピック，1956年のメルボルンでのオリンピック，さらに，1964年の東京でのオリンピック大会の時にデモンストレーション競技として，ベースボールが取り上げら

* 慶應義塾大学体育研究所助手

れ，その後，1984年ロサンゼルスオリンピックと，1988年ソウルオリンピックでは，エキジビション競技として認められ，ついに，1992年に開催されるバルセロナオリンピックにおいては，正式種目として承認されるまでに至ったのである。

このようにして発展してきたベースボールを，今回は，バルセロナオリンピックにおいて，アメリカナショナルチームの中心的存在となるアメリカ・カレッジベースボールに焦点をあて，その組織と現状について調査し，さらに，わが国の大学野球との比較をし，検討を試みた。

II. 組　　織

アメリカ全土のベースボール・チームを持つすべてのカレッジは，NCAA (NATIONAL COLLEGIATE ATHLETIC ASSOCIATION), NAIA (NATIONAL ASSOCIATION INTERCOLLEGIATE ATHLETICS), NJCAA (NATIONAL JUNIOR COLLEGE ATHLETIC ASSOCIATION) のいずれかの連盟に所属し，そこで決められている同一の規約，ルールに基づいて，チームを編成し，年間のスケジュール等を作成しなければならない。そして，それぞれの連盟が，シーズン終了間際に開催する NATIONAL CHAMPIONSHIP を目指して，練習に励み，試合に臨むのである。今回は，これらの連盟の中でも最大の規模を誇る NCAA の組織について検討してみた。

NCAA は，DIVISION-1（1部リーグ），DIVISION-2（2部リーグ），DIVISION-3（3部リーグ）の3部に分けられている。そして，それぞれのリーグで NATIONAL CHAMPIONSHIP を開催することを義務づけている。わが国で通称言われている全米チャンピオンチームとは，DIVISION-1 で CHAMPIONSHIP を勝ち得たチームのことである。

1. DIVISION-1

全米で100余のカレッジチームが所属しており，それぞれの地区リーグに属し，年間60試合を消化することになる。アメリカは，あらゆるスポーツのシーズン制が徹底されていて，ベースボールもその例外ではない。そのシーズンを大きく分けると2つに分けられる。1つは，FALL-SEASON であり，もう1つは，REGULAR-SEASON である。FALL-SEASON はいわゆる PRACTICE-SEASON にあたり，毎年10月第1週の月曜日からスタートし，その期間は7週間である。このことは，NCAA で決められており，全てのチームはこれを忠実に守ることを義務づけられている。またこの期間の PRACTICE-GAME も10試合に決められている。また，REGULAR-SEASON は，1月第1週の月曜日からスタートし，約3週間の練習の後，OFFICIAL-GAME に突入していくのである。シーズンは5月末までであり，その後

PLAY-OFF を経て，6月中旬に行なわれる COLLEGE WORLD SERIES で幕を閉じることになる。また，チームの PLAYER の人数は，30—35人の間であり，チームとして，13人分の SCHOLARSHIP を持っているのが現状である。DIVISION-1 の地区リーグは，以下の通りである。

◉BIG EIGHT

1. OKLAHOMA STATE
2. OKLAHOMA
3. NEBRASKA
4. MISSOURI
5. KANSASS
6. IOWA STATE
7. KANSASS STATE

◉MCC (MIDWESTERN COLLEGE CONFERENCE)

EAST

1. XAVIER
2. NOTRE DAME
3. DETROIT
4. DAYTON

WEST

1. EVANSVILLE
2. BUTLER
3. ST. LOUIS

◉MVC (MISSOURI VALLEY CONFERENCE)

1. WICHITA STATE
2. CREIGHTON
3. INDIANA STATE
4. BRADLEY
5. SOUTHERN ILLINOIS
6. ILLINOIS STATE

◉PCAA (PACIFIC COAST ATHLETIC ASSOCIATION)

1. CAL STATE FULLERTON
2. NEVADA-LAS VEGAS
3. V. C. IRVINE
4. FRESNO STATE
5. V. C. SANTA BARBARA
6. SAN JOSE STATE
7. CAL STATE LONGBEACH
8. PACIFIC

◉WCAC (WEST COAST ATHLETIC CONFERENCE)

1. LOYOLA MARYMOUNT
2. PEPPERDINE
3. SANTA CLARA
4. SAN DIEGO
5. ST. MARY'S
6. NEVADA-RENO
7. SANFRANCISCO

◉PAC 10-NORTH (PACIFIC 10 CONFERENCE)

1. WASHINGTON STATE
2. OREGON STATE
3. GONZAGA
4. WASHINGTON
5. PORTLAND STATE
6. PORTLAND
7. EAST WASHINGTON

◉PAC 10-SOUTH (PACIFIC 10 CONFERENCE)

1. STANFORD
2. ARIZONA STATE
3. U. C. L. A
4. CALIFORNIA
5. ARIZONA
6. U. S. C

◉WAC (WESTERN ATHLETIC CONFERENCE)

1. BRIGHAM YOUNG
2. HAWAII
3. SAN DIEGO STATE
4. WYOMING
5. NEW MEXICO
6. UTAH
7. AIR FORCE
8. COLORADO STATE

◉BIG TEN

1. MICHIGAN
2. MINNESOTA
3. INDIANA
4. IOWA
5. MICHIGAN STATE
6. WISCONSIN
7. PURDUE
8. OHIO STATE
9. NORTHWESTERN
10. ILLINOIS

◉MID-AMERICAN

1. CENTRAL MICHIGAN
2. MIAMI
3. EASTERN MICHIGAN
4. KENT
5. WESTERN MICHIGAN
6. BALL STATE
7. TOLEDO
8. OHIO
9. BOWLING GREEN

◉OHIO VALLEY (OHIO VALLEY CONFERENCE)

NORTH

1. EASTERN KENTUCKY
2. MOREHAD STATE
3. YOUNGTOWN STATE

SOUTH

1. MIDDLE TENESSE
2. MURRAY STATE
3. TENESSE TECH
4. TENESSE STATE
5. AUSTIN PEAY

⊙AMCU (AMERICAN MID CONTINENT UNIVERSITIES)

BLUE

1. CLEVELAND STATE
2. VALPARAISO
3. ILLINOIS-CHICAGO

GRAY

1. EASTERN ILLINOIS
2. S. W. MISSOURI STATE
3. WESTERN ILLINOIS
4. NORTHERN IOWA

⊙SWC (SOUTHWEST CONFERENCE)

1. ARKANSAS
2. TEXAS
3. TEXASA & M
4. RICE
5. HOUSTON
6. TEXAS TECH
7. BAYTOR
8. TEXAS CHRISTIAN

⊙ASAC (AMERICAN SOUTH ATHLETIC CONFERENCE)

1. NEW ORLEANS
2. S. W. LOUISIANA
3. LOUISIANA TECH
4. LAMAR
5. PAN AMERICAN
6. ARKANSAS STATE

⊙SWAC (SOUTHWESTERN ATHLETIC CONFERENCE)

EAST

1. JACKSON STATE
2. AICCORN STATE
3. MISSISSIPPI VALLEY
4. ALABAMA STATE

WEST

1. SOUTHERN
2. GRAMBLING
3. PRAIRIE VIEW
4. TEXAS SOUTHERN

⊙SOUTHLAND (SOUTHLAND CONFERENCE)

1. SAN HOUSTON ST.
2. U. T. ARLINGTON
3 S. W. TEXAS STATE
4. STEPHEN F. AUSTIN
5. MCNEESE STATE
6. N. E. LOUISIANA
7. NORTHWESTERN ST.
8. NORTH TEXAS STATE

◉SEC (SOUTHEASTERN CONFERENCE)

1. MISSISSIPPI STATE
2. LOUISIANA STATE
3. AUBURN
4. KENTUCKY
5. ALABAMA
6. FLORIDA
7. GEORGIA
8. TENESSE
9. VANDERBILT
10. MISSISSIPPI

◉METRO (METRO CONFERENCE)

1. FLORIDA STATE
2. VIRGINIA TECH
3. SOUTH CAROLINA
4. MEMPHIS STATE
5. CINCINNATI
6. LOUISVILLE
7. SOUTHERN MISS

◉TAAC (TRANS-AMERICA CONFERENCE)

EAST

1. GA SOUTHERN
2. STETSON
3. MERCER
4. SAMFORD

WEST

1. ARK LITTLEROCK
2. HARDIN-SIMMONS
3. CENTENARY

◉SUN BELT (SUN BELT CONFERENCE)

EAST

1. JACKSONVILLE
2. VIRGINIA COMM
3. OLD DOMINION
4. VNC CHARLOTTE

WEST

1. SOUTH ALABAMA
2. SOUTH FLORIDA
3. WESTERN KENTUCKY
4. ALABAMA-BIRM

◉ACC (ATLANTIC COAST CONFERENCE)

1. GEORGIA TECH
2. N. C. STATE
3. CLEMSON
4. NORTH CAROLINA
5. WAKE FOREAST
6. MARYLAND
7. VIRGINIA
8. DUKE

◉ECC (EAST COAST CONFERENCE)

1. RIDER
2. DELAWARE
3. TOWSON STATE
4. LAFAYETTE
5. HOTSTRA
6. BUCKNELL
7. LEHIGH
8. DREXEL

◉BIG EAST

NORTH

1. ST. JOHN'S
2. CONNECTICUT
3. PROVIDENCE
4. BOSTON COLLEGE

SOUTH

1. SETON HALL
2. VILLANOVA
3. PITTSBURGH
4. GEORGETOWN

◉CAA (COLONIAL ATHLETIC ASSOCIATION)

1. RICHMOND
2. EAST CAROLINA
3. JAMES MADISON
4. UNC-WILMINGTON
5. GEORGE MASON
6. WILLIAM & MARY

◉ECAC (EASTERN COLLEGE ATHLETIC CONFERENCE)

UPSTATE NEW YORK

1. LEMOYNE
2. UTICA
3. CANISIOUS
4. SIENA
5. NIAGARA
6. COLGATE

METRO NEW YORK

1. FAIREIGH DICKINSON
2. MONMOUTH
3. LONG ISLAND
4. ST. FRANCIS
5. WAGNER

DIAMOND

1. NEW YORK TECH
2. C. W. POST
3. PACE
4. WEST CHESTER
5. BROOKLYN

MAAC

1. LA SALLE
2. FORDHAM
3. IONA
4. FAIRFIELD
5. ST. PETER'S
6. HOLY CROSS

NEW ENGLAND

1. NEW HAMPSHIRE
2. MAINE
3. HARFORD
4. NORTHEASTERN
5. VERMONT
6. CENT CONNETICUT

◉EIBL (EASTERN INTERCOLLEGIATE BASEBALL LEAGUE)

1. NAVY
2. HARVARD
3. DARTMOUTH
4. YALE
5. COLUMBIA
6. ARMY
7. PRINCETON
8. CORNELL
9. PENN

◉ATLANTIC-10 (ATLANTIC 10 CONFERENCE)

EAST

1. RUTGERS
2. MASSACHUSETTS
3. TAMPLE
4. RHODE ISLAND
5. ST. JOSEPH'S

WEST

1. WEST VIRGINIA
2. GEO WASHINGTON
3. PENN STATE
4. ST. BONAVENTURE
5. DUQUESNE

以上の地区リーグから48チームが，それぞれの地域で PLAY-OFF を行い，さらにそれを勝ち抜いたチームが，CHAMPIONSHIP を闘うことになる。

2. DIVISION-2

全米で50余のカレッジチームが所属しており，DIVISION-1と同様に，年間60試合を消化する。また，FALL-SEASON, REGULAR-SEASON の期間も同期間である。そして，シーズン終了間際にそれぞれの地区リーグの代表が集結し，DIVISION-2 の CHAMPIONSHIP を争うことになる。DIVISION-1のチーム比較して異なる点は，SCHOLARSHIP の人数が少

ないということである。

3. DIVISION-3

全米で40余チームが，これに所属しており，FALL-SEASON，REGULAR-SEASON の期間は，他のリーグと同期間であるが，年間の試合数が50試合であり，他のリーグと比較すると10試合少なくなっている。また，SCHOLARSHIP の制度はまったくなく，PLAYER も 18—25人と少ない。しかし，他のリーグと同様に，CHAMPIONSHIP は6月に開催する。

上述のように，NCAA の組織について論じてきたが，わが国と比較してみて大きく異なる点は3点あると思われる。まず第1点は，練習期間，試合期間の統制である。日本の場合は，それぞれの地区リーグ，あるいは大学に一任しており，チームの事情，リーグの都合等により，日程は決められていないが，アメリカの場合は，統制されており，もし，このルールを破棄するチームがいたとしたら，出場停止の処分が下されることになる。このことは，フェアプレーの精神が，その中に流れているのではないかと思われ，また，徹底したシーズン制を採用しているアメリカのスポーツに対する考え方の特徴の1つかもしれない。

第2点は，アメリカの場合は，DIVISION-1，2，3でそれぞれ CHAMPIONSHIP を開催し，リーグごとの CHAMPION TEAM を決めるが，わが国の場合は，各地区の1部リーグの優勝校だけが，全日本学生野球選手権と称して CHAMPION TEAM を決めるが，2部リーグ以下の CHAMPIONSHIP は開催されていないのが現状である。

最後の第3点は，SCHOLARSHIP 制度のことである。アメリカの場合は，学業とスポーツの両立を大前提として，この制度を採用し，大きな成果をおさめている。これに対してわが国の場合は，いくつかの大学が，これに似かよった形でこの制度を導入しているように思われるが，この制度の本質である学業とスポーツの両立の面から推察してみると，必ずしも，アメリカのそれとは一致していないように思われる。

Ⅲ. 現　　状

アメリカのカレッジベースボールチームは，1年間を3つに分けてスケジュールを作成している。第1は，FALL-SEASON，第2は，REGULAR-SEASON，第3は，OFF-SEASON である。

1. FALL-SEASON

期間は，毎年10月第1週の月曜日から7週間である。この期間のそれぞれのチームの大目標は，チームの編成にあり，いわゆる練習期間である。そして，先シーズンからチームに所属している PLAYER，新しく入ってきた PLAYER を，すべて同一条件にして，そこでお互いに競争させ，チームのレベルアップを図り，その結果，最終的に PLAYER を30—35人に絞るのである。これを“TRY-OUT”と言うのである。この選にもれた PLAYER は，向こう1年間，自分でトレーニング，練習を積み，翌年，TRY-OUT に再チャレンジするか，または，他校に transfer して，新天地でプレーを続けるかの二者択一を迫られるわけである。また，選ばれた PLAYER は，来たるシーズンの戦力として登録され，先シーズンの反省を再確認し，今シーズンの目標，方針等をコーチから伝えられ，それらを，練習を通して習得していくのである。

練習に関しては，非常に Individual-skill が多いことが，特徴の1つであると思われる。その内容は，基本的なプレーの反復である。各コーチが，個別に基本動作を教え，それが出来るまで，繰り返し，繰り返し，根気よく練習させる。そして，その成果を実践で発揮させることになる。また，ウエイトトレーニングに関しては，わが国の場合のように，すべての練習後に補強的に行なうのではなく，練習前に約1時間から1時間半の時間をかけて，入念に行なわれる。そのプログラムは，ウエイトトレーニングの専門家が作成にあたり，また指導する。この件に関しては，ベースボールコーチは，一切口を出すことは許されない。これもアメリカの専門性を非常に重んじるという特徴の1つであると思われる。練習時間は，ウエイトトレーニング，Individual-skill, Offence, Defence の練習を含めて，約3時間から3時間半である。しかし，PLAYER は，この決められた練習以外に，個人で，自主的に鍛練し，自分の能力のレベルアップを図る。このことは，あくまでも PLAYER 側からの要望であり，決して COACH 側からの強制ではない。この点はわが国の練習姿勢と比較してみると，まったく反対の意識であると思われる。つまり，他人から強制されている練習と，自分からすすんでやる練習との違いである。

また，アメリカのカレッジチームの特徴は，それぞれのチームが，非常に個性的で，独自のチームカラーを持っているということである。これは，Offence, defence，戦法，走塁等すべての点に現われている。このことは，この期間中，PLAYER と COACH のコミュニケーションが密であり，お互いにチームの方針，目標等を認識し，納得しているからであると思われる。以下に掲げるものは，アメリカのある大学の1988年の FALL-SEASON の TEAM GOAL の一例である。

FALL TEAM GOALS

Our Motto "Whatever it takes."

It's not difficult to go from a mediocre team to a good team; but, to go from a good team to a great team you have to get specific. You have to knock-out the errors, the walks by pithers and you have to take care of everything to be the best team you can be. To do this, these are the goals we must accomplish this falls:

#1 Develop a stronger physical and mental discipline by working harder.

#2 Develop the best winning attitude we have ever had.

#3 Develop in the minds of each player all the technical aspects of hitting, fielding, pitching, running, and throwing.

#4 Develop a belief in one another by bringing the team together.

#5 Give every man who tries-out an honest opportunity to make this baseball team.

CHECK-LIST OF THINGS TO COVER THIS FALL.

General

1. Orientation-Philosophy.
2. Weight Training.
3. Plyometrics
4. Agilities
5. Speed and Endurance Running.

Offence

1. Bunt (Sacrifice man on 1 b, man on 2 b, squeeze, dreg, dump.)
2. Slash
3. "Joe College" (Advance runner from 2 b with 0 outs)
4. Hit and Run
5. Baserunning (leads, breaks, dive-backs, stand-backs, stealing 2 b, stealing 3 b, delay steal, scoring from 2 b, running from lst to 3rd, ball in dirt, "ramble", run-downs, tagging-up, taking extra base)
6. Hitting Fundamentals)

Defence

1. Run downs

2. Delay steal……lst ane 3rd.
3. Bunt Defence.
4. Catchers Throwing.
5. Catchers Balls in Dirt.
6. Pitch-outs fog catchers and pitchers.
7. Pitchers Moves to Home, 1 b and 2 b.
8. Pick-off Play to 1 b, 2 b ("pop", "count").
9. Pitchers Fielding (covering 1 b, bunt, choppers).
10. Cut-off and Relays.
11. Outfield Flies, Grounders (Fungo, Batting Practice, Game Situations).
12. Infield pop-ups, Grounders (Fungo, Batting Practice, Game situations).
13. Infield In (Decoy) and Infield Back (Decoy).

2. REGULAR-SEASON

1月の第1週の月曜日から SEASON が再開され，体作り，実践に即した練習を繰り返し，最後の調整を行ない，トップコンディションで試合に臨むのである。Official-Game は，2月から全米各地で展開され，5月末まで60試合（DIVISION-3 の場合は50試合）を消化する。試合のスケジュールの組み方は，授業に支障がないように，week-end の3日間を利用して，3連戦システムを採用している。そして，そのほかに week-day の1日を試合にあてる。これは，授業との関係上，Night-game の場合が多い。球場は，それぞれの大学の Baseball-field を使用する。同一地区リーグの対戦は，Home で3試合，Visitor として3試合，計6試合行なうが，対戦日程は，シーズンの前半と後半に分かれて組み込まれている。このことは，お互いのチームの戦力分析が出来るため，また，後半においては，各チームの順位が大体つかめるために，かなり白熱化した試合が行なわれることが多い。また，ユニフォームは，わが国のプロフェッショナルチームと同様で，Home 用（white）と Visitor 用（gray）の2種類を揃えている。各チームの順位は，勝率で争われることになる。そして，同一地区リーグの勝率と全試合の勝率と2本立てになっている点は，非常に興味を示すことである。わが国の場合は，どのリーグも勝ち点制を採用している。

日本と比較すると，試合数が圧倒的に多く，同一地区リーグだけの試合数を比較しても，アメリカは30試合近く対戦するが，日本の場合は約半分である。このような状況から判断しても，必然的に，選手の起用法，または試合の戦法なども違っているように思われる。アメリカの場合，PLAYER は，game で鍛えられ，そして上達していくように思われるが，日本の場合は

練習で鍛えられていくように思われる。その結果，実践に強いタイプ，弱いタイプというような区別が生じてくるのではないかと思われる。また，コーチに対する評価にしても，必ずしも一致はしていない。チームの成績を上げることは，重要な使命であるが，そのほかに，どのような方法でPLAYERを養成しているかという指導法も，かなり重要な役割の1つである。従ってコーチは，PLAYERを絶対に酷使はしない。常にベストコンディションであるPLAYERを試合で使う。このことは投手の起用法によく表われている。必ず，コーチは，先発投手陣を数人作り，ローテーションをしっかりと確立させ，連投は決してさせない。そして，試合を勝ち抜いていくのである。最後に忘れてはいけないことは，各チームには，専属のトレーナーがいるということである。

Ⅳ. む　す　び

以上のように，アメリカのカレッジベースボールの組織と現状について論じてきたわけであるが，日本と比較した場合，すべての組織の面で非常に統制がとれていて，理路整然としている。練習期間の制限，SEASON-OFF の設定なども正確に定めている。また，各リーグ共，それぞれ CHAMPIONSHIP を開催するということも，わが国とは大きな相違がある。しかし，根本的な違いは，シーズン制の違いに端を発していると思われる。アメリカの1シーズン制に対して，わが国は，現在，2シーズン制を採用している。そして各シーズンごとに選手権大会を開催するため，1年間で2校の CHAMPION が誕生する現象があらわれてくる。アメリカの場合は，常に1校である。また，これに伴ない，試合数の多少が生じてくる。アメリカは，4カ月間の SEASON に60試合というハードなスケジュールを消化する。日本の場合は，各シーズン 10-15 試合の消化である。その結果，アメリカの PLAYER は実戦で鍛えられ，game において勝負強い PLAYER に育つのであるが，日本の場合は，試合数が少ないため，練習期間に多くの時間をさくため，試合において自分の力を全て発揮できないままプレーをしてしまう PLAYER が多いように思われる。このことは，組織だけの問題ではなく，多分に国民性の違いも加味されてくるだろうと思われるが，勝負に対する執着の度合いが違う。また，アメリカのカレッジベースボールの COACHING STAFF，PLAYER は，常に，プロフェッショナルベースボールに対し，強い関心を示しており，PLAYER は，MAJOR-LEAGUE を目指して練習に励み，試合に臨み，また COACH も，それに沿って，PLAYER を養成し，型にはめず，それぞれの個性，長所を大きく伸ばすことに重点を置いて指導にあたる。これに対して，日本の COACHING STAFF は，目先の勝敗にとらわれすぎ，PLAYER の個性，長所を把握していないことが多いように思われる。これは，現在のシステム自体に問題がある

かもしれないが，あくまでも指導者の意識レベルの問題であるように思われる。今後，益々，国際化が進み，国際大会に出場する機会も増え，3年後にはバルセロナ・オリンピックにおいて，正式種目としてメダルを目指して闘うことになるわけであるが，そのためにも，現在にも増してアメリカンベースボールを真剣に学び，科学的にも，実践的にも取り入れ，より攻撃的なベースボールを目指す必要があるように思う。

＜参考文献＞

(1) 『世界アマチュア野球史』1980，ベースボールマガジン社，カルロス・J・ガルシア著，鈴木美嶺訳。
(2) 『野球』1983，講談社，石井藤吉郎著。
(3) "NCAA BASEBALL RULE" NCAA, 1988.
(4) "COLLEGIATE BASEBALL" 1988.